



關西戲作者略傳
附浮世絵序



特別
イ 4
3159
B 70





合川館珉和京師の人

14
3159
B70



今川鐘成

曉鐘成

浪花の産也、木村氏、名は明啓、俗稱彌四郎、曉鐘成は其戲號にして、亦鶏鳴舎と號す、童蒙教訓民家必用の雜書、且戲數多く出す、又畫に巧なり、因て同畫作の書あり、後に西生郡難波村慈雲山瑞龍寺(今俗に鐵眼と唱ふる寺あり)門前に住す、後剃髮して未嘗志留坊(ばり)禪と號す、又戲れに田舎の住居あれば、在職森村南坡とも稱す、居宅哉午鍋菴と稱す、其祀あり左に誌す、(嘉永五年子還曆の年、由らにつき、俗稱哉晴翁ともありとむ)

〇 浅山蘆洲 (Shan Roshu) 號狂畫堂
 物に癖あり、秋行の癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 何處かへ、有難き癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 昔は出陣の癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 花箭に (心谷に幾度も射る) 思ふに、
 西へ出陣行の癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 追風疾走の癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 射るに其癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 彼等の癖あり、(昔は出陣の癖あり)
 射る癖あり

浅山蘆洲 號狂畫堂

大坂の人、俗稱布屋忠三郎、蘭林齋門下
 蘭英齋と云、後狂畫堂と改む、文政三年戊寅九
 月五日没、下寺町延行寺に碑有、釋順清行年四十
 餘

是等先浮世繪拔萃の分也、此餘凡々の徒は枚
 擧げし違ふあり、依之略す

Yemul / 五段也
圖に記す、各舞大起由片、或舞二の段、或片
櫻衣(舞舞石の舞の鑑圖巴切)の舞段の、
若と記す、若と記す、或舞舞二の段、
大起由片、或舞舞二の段、或舞舞二の段、
一舞舞舞舞

井原西鶴

西鶴は井原氏なり、年來ひさしく大阪鎗屋
町に住けり、俳諧は宗因の門人にて、松壽軒と號
し、亦是難波俳林と稱す、點譜には、最上の點な
り、長點以下常の如し、よく世情にわたりて、戲作の冊
子あまた著はし、一時戲名を高ふせり、其書は男色
大鑑、西鶴織留、世間胸算用、一目玉鉾、日本永代
藏、西鶴置土産、西鶴彼岸櫻、西鶴名残友、小夜
嵐この餘いばくもあふ、(種員曰西鶴貞享三
年四年の頃西鴨と改名す、其頃の俳書或は新
可笑記等に西鴨とあり、又新小竹集には蘆華
亭南鴻とあり、是も西鶴なり)人々今日目前に見

る所我述て、滑稽我盡す事は西鶴よりはごまされり、
近松門左衛門も、俳諧は西鶴に學ぶといふ、俳諧のみ
にあらざる、此人儒佛の學にも富て、學力より出す所
ふれば、餘の凡々の戯作者の企およびがふるき所あり、
大約元祿年間、の戯編には俳諧師の作甚からず、
箕山が大鑑、兩巴色言、鷺水が丹前艶男、團水が男
女色競馬、立圃が京童、又は俳諧師ちうで鈴木昌山
(正三のことあるべし)、淺井了意、錦文流が徒著述の
まゝ有れども、戯作の才は西鶴殊に優れり、爾後ハ
文舍自笑、江島屋其磧、西澤一風に至りて、西鶴が筆
意に倣ひ、潤色して一部に趣向たり、佗客老圃の頗
を解せしうば、これらもその名を噪しふせしむども、皆西

鶴の二乃町やいやいふべうらん殿、西鶴は元祿六年癸
酉八月十日没す、年五十二歳、墳墓は大阪八丁目寺町
誓願寺、本堂西の背南側に在り、「仙皓西鶴」と大書す、
辭世

人間五十年の究りしれさへ我には何まりあるにま
してや、

浮世の月過りにけり末二年歳

元祿六年八月十日五十二歳

万葉六十八日十月廿二日

宛切の五割一トヤ一ヤニ年一歳

一トヤ

入題出十科の節一ムヲハク其トハレホ一ウダニナ

遊カ

昔は藤原、本朝名を担担重トナシ、今も思魂トナ大朝臣ト、
思八日十日取ト、年廿二歳、藤原大政ハ一ト目ト思
魂ハ一ト思ハムトシ、今一ト思、思魂ハ一ト思ハムトシ、

田果道士 又字冠先生といふ

姓藤原、名は規、字は景寛、俗稱は中島又ま、京
師の人、儒者にして事ら侍文に名有り、傍はら戯作
也、京都紫昌祀、濃快史等の著述、縦横馳騁
の才力哉、觀るべし、又匿名の国字小説の作も有り、好み
て諸國を遊歴す、探隱ト號す

大坂の
大坂の人、越後色三海坊、思田氏、興國洞女、兼
馬車園地、源

歌川貞廣
大坂の人、難波新地に在り、俗稱京丸や清次郎

大坂の人 職家 築野 府止 俗稱 金屋 和 三郎 柳
歌川貞升

大坂の人 農人 橋邊 任す 俗稱 金屋 和 三郎 柳
亭に相次ての巧手あり

大坂の人、島の内、齋橋通に住す、俗稱肥屋貞貞
歌川貞芳

大坂の人、島の内、齋橋通に住す、俗稱肥屋貞貞
七郎

野井の人

大谷野井

京師の人
鶴山逸人
瀬川氏
名は恒成

佐野のく、瀬にのり、名は河に
魁と流す

京師の人、菊丘臥山人
江天坡と稱す、天明年間の人

好徳の人、字次郎、鎌倉、大正、年題の人
手塚氏、北溟と號す

橘生堂、兔月
手塚氏、北溟と號す

毛筆、右頁の題名、
浄瑠璃の作

紀海音

單林子同時の人にて其頃狂歌に名高き油煙齋
貞柳が弟子にて、大坂の人也。撰並氏にて俗稱は鯛
屋喜左衛門、後に善人と改む。初めは黄檗山悦
小和尚に屬して僧とあり高節といふ夫より、醫西道
女業ともし又契沖子の門に遊びて契由島路觀と
號す。浄瑠璃の作名紀海音といふ。豊竹座の操
の作者にて近松と並び稱せらる。生涯狂詠を好みて
貞柳の弟子と成、貞寂と號す。道頓堀太左衛門
橋筋に任して菓子和とある老年に至りて又剃髮
せしや。元文元年辰の夏、法橋に叙せらる。寛保
二年戌十月四日八十歳にて没す。法號清潮院

海音日法と稱す。八丁目寺町寶樹寺（紅葉の寺
と云）に葬る。

京鶴

京師の人。文政の頃戯作の書を出す。名は貞卿
字は和忠。山月主人と號す。小川氏、俗稱美濃屋
文藏、初曉鐘成門人と成。隆成と號す。當時西
の京に住す。

大坂の人、俗思齋、
余大勢主人

近路行者

大坂の人、名は庭鐘、字は公聲、大江漁父と號し、又辛夷館と號す、近路行者は其戲號也、俗稱大都賀六藏といふ、儒醫戎業とす、書畫戎善す、風流の才有て、小説神史の趣戎得たり、英雙帝、繁々夜話、垣根草等數部の佳作あり、寛延寶曆より明和の頃の人也。

好花堂野亭の書
好花堂野亭の書

好花堂野亭

大阪の人。俗稱は山田桂藏といふ。好花堂野亭は其
戲號あり。戲作の書數多あり。又山田栗山子と稱して
淨瑠璃の作女あり。初は新野廓中にて書家事業
とし、中頃は順慶町三丁目に居り。又島の内木挽町に
在り。剃髪して意齋と號す。其時の狂歌

僧とてし、茶人にあり。醫者下あり

意齋ゆらぬ坊主せり

終に京師三條寺町に寓居せしが、弘化三年午十一
月廿四日に没す。行年五十九歳。法名寒空意禪定門

五島つろ
大坂の人、天満南同心町に住す、東海奉行
の同心、増田勘藏と云

五島つろ
大坂の人、天満南同心町に住す、東海奉行
の同心、増田勘藏と云

巴画の如く、惣括りて、
大哉の、大編括りて、
出題して

西郊田樂

尾張の人、江戸草雙成作に、木の芽田樂と
いふは、此人ありんか

藤太、男、狂歌集の
狂歌の人、江戸草子、狂歌集の作者、木村、狂歌集の
狂歌集

佐藤魚丸

大坂の人、浄瑠璃歌舞伎狂言等の作者、佐藤太といふは此人也、阿波座戸屋町に住す、狂歌我好て國丸の門人とあふ、蝙蝠軒と號す、自詠の狂歌集哉、よつ友と題す、

話)犬(佐野源左衛門源藤太の事)此餘尚數種
有り此葬の話は豊晴助取て、けしん筑紫敷とて大
當りせしあり

松好齋

大坂の人、俗稱半兵衛、島の前清水町に住す、浮
世繪を善くし、俳優の肖像を摸するに巧也、亦戲
作たり、楽屋名所圖繪、同拾遺、役者十寸鏡
等の作あり、寛政より文化年間の人也

京師の人 春羽平樓主人
春羽平樓

京師の人、松川氏、名は米廣と云、畫作堂に在り

密師の人、為三女、古な米屋の、轉賣するにた
春朝齋主人

春朝齋
京師の人、竹原氏、

伏見の人、千代女、
春陣齋

睡徳
京師の人、文政の頃戯作の書を出す、名は可
香、教恋香亭と號す、俗稱未だ考へず

其忍び入し壁の穴の跡に短冊付たり

我すりのまづき人なり哀れなる

其かゝるものちひやくくり来て

諸人は其を見て、賊の入りしを初て知れり、後京師に任じ、和歌古学を以て世に鳴る、著述の書多し、前茶の書清風瑣言など最精し、戯編の書は雨月物語五巻又春雨物語五巻寫字にて行はる、聞耳世間猿といふ、八字や物の本也も出す、近頃癖物語といふ滑稽本也も出せり、江戸の太田蜀山人、其人と成りたり奇として、長夜室記を作りと、贈りたり、晩年京師に遊び、非藏入羽倉豊前の屋敷の内に、疊半の家を建て、住す、常に粗茶すりと土鍋に入れ焚て喰す、菜は胡麻

鹽とひくし味噌といへる二味に過ず詠するところの和歌多し、鹿の歌に

さよよ〜これぬきあむと〜山任の

軒のやとこの鹿の〜こゑ

遂に此處に没しぬ、時に文化六年、享年七十八歳、餘齋が四疊半の居室の壁書、

家賢かん〜やく丸

オ〜も〜は〜のさむさ〜たへも

禁物

酒者 又はニ 油(阿波訓に云アア)

す(て)りもの〜や〜き〜た〜らふ

文人 茶人 財主 臭氣不可對

出店類葉無之候

武内確齋

大坂の人、諱は温俗稱平左衛門、布屋町に住す、藤崎三島老人門人、小説の八島著述、又繪本大関也、平漢諱、阿夜可志諱等は、右の確齋作にて、平山の名姓借りしものありと云ふ

の頃仕官を辭て、退て浪人し、近松門左衛門と名乗り、
歌舞伎芝居都方大夫が座の狂言の作哉おし、又宇治加
賀掾、井上播磨掾等が爲に淨瑠璃哉作る、其後元祿
三年庚午正月、京都より浪花え下り、竹本筑後掾
が爲に淨瑠璃を數多著述し、其名を世上に轟かせり、元より
和漢の書籍哉學子び博識にして、よく時世の人情哉
察し、下情哉穿ちて數百番の淨瑠璃を作れり、中にも
國性爺合戦（此狂言大當りにて三年打てける）、名
譽もいふ（し）雪世五枚羽子板、曾我曾稽山等、尤其
妙哉得しとぞ、享保九年辰十月廿二日、（種員曰、西澤一
風子が外題年鑑には平安堂の物故同年同月廿二日と
あり）七十二歳にて身まかりぬ、大坂八丁目寺町法妙

寺に葬むる、辭世の文左に誌す、（戒號は世に存し時設置
もるせもいふ）

代々甲由月の家に生れながら武林哉離れ、三槐九卿に
つかへ、咫尺し奉りて寸辭おと、而井に漂て商賣知
らず、隱に似て隱に非ず、賢に似て賢おらず、物知り
に似て何も知らず、世のまがひもの、唐の大和のをしへ
ある道々、伎能雜藝滑稽の類迄、知らぬおぢに口
にまかせ、筆にはしらせ一生を囀りちらし、今はの際
にいふべく思ふべき眞の一大事は、一字半言もおき倒
惑、心に心の耻哉おほひて、七十餘りの光陰おもえば
ちばつかぢき、我世經畢、もし辭世はとらふ人あらば、
いそれ辭世まほに扱もその後にのこるさころの花しには

は

享保九年中冬上旬入寂名

阿耨院穆矣日具足居士

不俟終焉期豫自記春秋七十二才

乃これと思ふしちろからつみ火の

けぬ間何ぶあるくち木かきこて

江戸本庄柳島妙見菩薩境内所在石碑如左

日本淨瑠璃歌舞伎稽戯作中祖

近松門左衛門藤原信盛文碑

曾祖近松門左衛門信盛、長州萩之藩臣杉林

某男也、後登京師、奉仕一條禪閣兼良公、賜

笏六位、因老病致仕、而遊攝之浪華、享保九年

甲辰十一月廿一日、七十有二歲而寂、則葬於攝州久々
智山廣濟寺、法號阿耨院穆矣日具足居士、當
百回之遠禱、收所遺草稿、而於北辱等前納
于石下、以樹文碑、且臨終辭世之狂歌一首、勒于石
面者也

文政十一戊子年十一月

曾孫

近松春翠軒織月

戲名心庵蝶々子誌

自足堂信尚書

洛東山

碑陰文

辭世

これ辭せざる程に

扱も其後にのころ

櫻のはふしにははア

八十八翁儉齋

大坂 近松平葉軒

京都 同門蝶

江戸 同門三

大坂金屋橋銅吹陣能登屋彦九郎藏懸物美人
の賛（紙中整三尺餘横一尺計畫は土佐畫のごとく
見ゆる由）

樂天が意中の美人は夢みむつ言

僧正遍昭の詠中の戀は繪にかける女

とりかたにはとれうこれか作廢去
物はすわらはぬ代にりんゝ氣ふゝ

衣裳表具のもののみせず

平安堂近松子七十一歳狂讚

この歌は、或は狂歌の師匠者や
抱か思へ、人奴等も一やの地、談鬼曲のよ兼うり
の所翻か、隠村の心、大坂の朝風かかへん、紫菀の巻
巻の巻文画の心、響也の巻巻の心、師か巻
大坂の人、名は隠村、師は朝風、巻大坂の巻、師
田恵平ト

鐵格子波丸

大坂の人、西浦氏、混沌軒因丸の高弟にして、
狂歌は善す、車塚の狂歌集、紀行等の書
を出す、別號糟長者、居室の格子は鐵にて造るゆへ
鐵格子と號す、波丸は狂名也、俗稱木津屋周
藏、立賣堀二丁目鐵問屋、文化八年辛未正月
七日没す

字は子允、號は正盈又騏驎とも言、字は子允、胸脈
將華園ニテ撰

胸脈先生

京師の人、名は正盈又騏驎とも言、字は子允、胸脈
先生、或は太平館主人と戲號す、俗稱は畠山賴
母といふ、聖護院の宮の諸大夫也、博識多才、生質
滑稽の人にて狂詩甚善し、太平樂府杯の狂詩
集に出して、東武の寐惚先生等より先輩あり、
又唐土奇譚等の戲編あり、後年風痺の症にて
物云々等能やれども、見廻りに来ん可れば即座に當
席の挨拶哉、狂詩に作りて出せしといふ、また或や
んごとふき御方(妙法院宮御門路)すでに死せし
と聞いめりて、追悼の御狂詩亦下さる。

傳聞先生胸脈揚、定是閻魔成敗場、

縱衝赤噓欺青鬼、魂魄猶迷極樂傍、

此時銅脈いまだ存生にて、和韻

墨玉躡手麻商賣揚、死生素是任相場、生分死

分斯面例、學子仙長欲盡阿傍、

享和元年辛酉ついに没す、

東籬亭

京師の人、名は正韶、字は鳳卿、尚古館と號す、
俗稱は池田左馬大允、蛸藥師、高倉西に住す、東
籬亭は其戲號也、名所圖繪類の書亦多く出す、
戲作の書も又數々あり、

行書

東林

長山孔寅

大坂の人、船場平野町口丁目に住す。書畫に巧あり、且狂歌好て、雀迎屋の群とあり、是福庵三條茂佐彦と號す。隨筆の書あり、負着物語五冊、嘉永二巳酉年九月廿七日没、時年八十五

二四四年 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶
五瓶 五瓶 五瓶 五瓶 五瓶

並木五瓶

此人も同門葉にて天明已來の作者にて、始は五瓶といふ
後五瓶に改たり、著作の狂言数百部、中名高は鍋
祭貞婦競、日本花森城踏置、金門五三桐、簿播州巡
歸命曲輪敷、けせの黄金鱗、けせの忍術池、けせの倭
莊子、天満宮菜種御供、けせの飛馬始、中名わけて島
廻戲聞書、四目より先は、今三都に専出する五大力懸
織屋、古今珍ら、き大當り取たり、寛政元年より江
戸に趣き、江戸に春狂言一番目時代物曾我外題何貳
番目世話もの何々と外題分て、出せしは此五瓶より始れり、
寛政十年末浪華江歸り、澤村字平郎同道にて傀儡浅
妻船、源平柱礎曆、隅田春妓容性等、出して當り取

享和元年酉再か江戸江趣き、江戸狂言は京攝の風を真し
當時作者は江戸にて^{初作}田治助、京攝は並木五瓶と並べ稱せら
る事成り、江戸は大門通高砂町に居たり、浅草堂と
號す、文化五年辰二月二日没す、行年六十二歳
辭世

梅はさく我は散り行如月也

五瓶

江戸浅草金龍山の奥山に五瓶が狂言塚あり、又浪花西
天王寺、雷門前納骨堂の前に墓碑あり、知巳の人となり
建たり、戲財録とて劇場作者の秘事を書き秘藏せ
し由ありしが、没後所在を失ひしと云、惜むべし、

並木正三

正三は大坂道頓堀宗右衛門に任て、俗稱は高
砂や平左衛門といふ、年古き菓子や走り、若き頃
より戯場を好み、並木宗助に入門して、歌舞伎狂言
數多著せり、霧太郎、天狗酒、天羽衣、桑名
屋徳藏入船話、日本中一和布刈神事、三拾石艦始等
也、名高き狂言は明和五年、大左衛門橋北詰の床に
茂兵衛といふ毛刺、富といふ女郎を殺せし、其翌日若
大夫其居に、急作の一夜附に宿無團七
時雨傘と題して大當り取たり、安永二年己没
し、墳墓は法善寺中に南無三寶正三墓と碑
に彫刻して今に名高し、

行年四十三歳安永三年春没

追悼の狂歌

此の人につく作者もやうな志みきく

何われけのふらふけり狂言

並木宗助

並木宗助、同天助、同永助、三人共大坂の人にて
淨瑠璃東もの豊竹座の作者也、宗助作は、清和
源氏十五段、攝津國長柄人柱、和田合戦女舞
鶴、釜淵雙紙巴、寛延年間に没して、遺稿
名浅の作は、各娘軍記あり、門人以次助作は那須
與市西海硯、荊萱桑門筑紫轢、登籠出入
湊、東鑑御狩卷、攝州渡邊橋供養、八重霞
浪華濱、菰等あり、中にも此八重霞は寛延二
年巳三月十八日天滿砂原の男殺しあり、長堀村
木や濱にて、大工と南新やまきの賣女と情死に神崎
の渡場にの大喧嘩、此三同日の事あり、女すむに作し

て廿日に外題哉出し、廿六日に狂言哉出せし所、古今の
大當り哉取、同年七月未迄打つけしは、丈助が手柄
といふよし、同門永助が著せしは、相馬太郎孝文談、
天智天皇苅轉庵、岸垣松輿盤等也、丈助永助は淨
瑠璃のみならず、歌舞伎狂言の作家もあらしり、
並木と稱す、作者は皆此門葉也、

上南里亭其樂

大坂の人、小林氏、名は貞、字は高悦、號万器
堂、別號陽樂市隱と稱す、南里亭は其戲號
也、島の内に住す、俗稱素六といふ、戲著の書多
し、始島の内に住し、後難波新地に移る。

る翁草のふ書に詳あり

以下浮世繪師

西川祐信

大坂の人。寶曆明和の頃畫作をにたり、文華
堂自得齋と號す。春色本戎も數種出せり。畫は最
上手也。俗稱追々可考。

大坂の産にて、明和安永年間の人。江戸堀に住せり。

滑稽の才名は、覆はれり。最おむむい其朋友志る摩迦羅茶幸録といふ人のものうたりなり。

三巻

又下家

可島齋

大坂の産にて、明和安永年間の人。江戸堀に住せり。俗稱松や平兵衛。骨董鋪を業とす。狂畫の達人にて好んで解僂角觝の姿を畫くに、何れぬ標にろふせども其情態をよく摸して大に雅致あり。又滑稽の才ありて、戲作もあせり。義太夫のタヤリ淨瑠璃上手にて松ッ平イと諸人稱して用ひゆへ、淨瑠璃の爲に、その畫名を滑稽の才名を覆はれり。最おむむい其朋友志る摩迦羅茶幸録といふ人のものうたりなり。

十出は家也、江戸にあり、
江戸にあり、各藩大腕の御用金、次第次第と
江戸にあり、各藩大腕の御用金、次第次第と
大腕の人、大腕の御用金、次第次第と
大腕の人、大腕の御用金、次第次第と

梅花野人
京師の人

白頭子
梅芳號

白頭子柳魚
大坂の人、文政の頃戯作の書數部を出す、聞
鶯軒と號す、俗稱未詳とす。

新編海防大綱
大政以、次第編纂、
御覽子抄

島山保躬
照月堂號す

長谷川貞信
字堂寺町浪華橋筋三任す
俗稱奈良也

長谷川貞信
大坂の人、字堂寺町浪華橋筋三任す、俗稱奈良也
徳兵衛

総本巻

大坂の人、字解如也、家解如也、字解如也、俗解如也、
家解如也

八文字舎自笑

附其笑、瑞笑、自笑、
梅枝軒泊鸞

自笑は性藤原にて安藤氏あり、俗稱我八文字屋八
左衛門と呼びて、京師藪屋町通哲願寺下ル所に
住書林也 西鶴に嗣て戯作の名人にて数百部の雙
糸我作る、傾城禁短氣、全曲三味線、全友三味線、全歌
三味線、全玉子酒、野傾色三子、分里艶行脚、都鳥
妻戀笛（浅間富士）裾野櫻、風流御伽曾我、全東
海硯、全東鑑、全軍配團、浮世新仁形氣などいふ
冊子、當世の人情我穿がちて、俗人の頭我解しめし
より、今の世に至るまで、八文字屋本とし、一種の體
裁ありて、人口に膾炙せり、或説に初代の自笑も、讀
本冊子あど作る、學字文才智は無ければ、一家産

のゆたかあるに任せて、南嶺子杯様々の人々頼み、代作を
させて、己が名を弘めし物ありといへるは、其書の時
好にかふひて夥しく賣し、或はねみたる人の悪説あり
延享四年冬、自笑樂日記を書納として、己後梓其
笑、孫瑞笑に作意を任せぬれば、常盤木の色かへず、
いや榮に御述下されかしと序に書、跋に自像を畫
かせ、南溟の大鵬寓言かと思へば、終に教とふる、

霜枯はさも河れ龜の長齡草

九十歳に近き自笑誌

又歌舞伎役者の、年々の藝の甲乙の評判記を
出せし(役者評判記も、最初は顔見世狂言の藝の評判
記計りを出せしが自笑の中年より、二の替りとして春狂言

の評判記を出し、三の替りとして盆狂言の評判記を出せ
り、此頃は京大阪江戸三都に、評に趣向立たる序文を
一ツツ出して、文才をふるひしものれども後の役者は序を
書と力あきて、序文を略して、二の替り三の替りの評判も
出さざるやふに成行て、評判もちとろ(たり)是亦大に世人の
賞譽に伺ひて、年々によく賣れしより、評判家の株のごと
く成たり、延享四年卯十一月十一日没す、齡八十八歳、其子
も又八左衛門と稱す、八丈舎其笑と稱號す、没年未だ
審あらず、孫も又八左衛門と稱し、八丈舎瑞笑と號す、
父祖に替らず相嗣て、戲作の書本著し、評判記を
出せしかども、其祖にいたく劣りたり、曾孫四代目の八
左衛門に至りては、其才遙に父祖に及ばず、自笑と

號して漸く評判記を出す而已ありしに、寛政初年の
京都大火に類焼して、家も大に衰へ、遂に大阪に下り
て心齋橋筋安堂寺町にかすかに渡せしめて、評判記
を出し居しが夫より其身没して後は、其子何某ある
者、放蕩無頼の破落戸にて産地破り家を失て、
中々評判記つくる事も出来ざりしに四代目自笑が家に
子がひより召仕ひし卯作といふもの、記憶よくして評判
記の綴り方哉覚へ、後自笑が悴の家を破りし後、
御霊前瓦町に住して、和泉屋卯作と稱し、梅枝軒右
鶯と號して新古の芝居繪本番附類賣買が家業
とし、折節には淨瑠璃の作事もあつたれども、芝居の
故典に委しきにつぎ、専ら評判記を出すせしかども、

已れ一人の名を出不さず、亡師の八丈舎自笑の名を
記して、已れと合作の如く記せり、天保九十の
年病て没す、享年五十餘歳

年幾く或は、毎一年一編撰
鳴ら、のちの合弁の旨、鳴ら、天保十一年の
のちの合弁の旨、鳴ら、天保十一年の

濱松歌國、南水

大阪の人、俗稱は布屋氏助又清兵衛、島の内布袋
町に住す、戯作書多し、専ら歌舞伎の事に委しく
狂言作者と云ふ、歌國は作名也、颯々亭南水と號す
或年役者評判記を作せしに、大谷友右衛門(三代目
の友右衛門)也、初は中山門三といふ、又嵐舎丸と云ふ
なるもの也、評の仕方ありきとて、故障せしむる故
其後は評判記は出さざりしあり、又南水漫遊とい
ふ隨筆亦著す、文政十年丁亥十二月十九日没す
行年五十二歳、法號花鳥歌國信士、

大坂の人、河津也、海也、
松三半子

三好松洛

原伊豫の国の産にして、松山城外の真言宗
願成寺の住持の還俗にして千前軒門人とす。
り、合作の浄瑠璃に佳作多し、明和八年卯、作る所
の妹脊山婦女庭訓の浄瑠璃本に松洛七十六歳の
作と云れば、餘程長壽しむる人と見えたり、此餘千
前軒が門人松田和吉、天耕堂と云ふ、吉田冠子とい
ふは、人形遣ひの名人也、吉田又三郎事にて出雲の門
人、皆高名の作者也、又此頃和莊兵衛と云名作の續
本作者は、遊谷と云阿波の人也。

京都の人 舞臺の舞臺
森川舞臺

保川春貞
京師の人 畫作のよになす

公卿の人、書翰の多し、
泉三春良

柳園種春
攝州武庫郡合津の人、小澤氏

蘇州沈氏畫譜卷之二
沈氏畫譜

流光齋

大坂の人、是亦上の人、同時也。浮世繪に巧也。
俳優肖像を能く寫す、名は如圭、俗稱洋志子、
ほり江瓶橋に住す。

多賀子健 同人於別人欲考可也

多額に金 四人は美人は幾人か

母は花魁の御也

無家な娘の舞へ踊れぬ 名は吉州、俗名舞おはし

大坂の人、既住にていふに画をわ、絵を鑑みれば

絵の鑑

柳齋

原崎陽も人、當時大坂島の内三津寺町に住す、名は重春、浮世繪俳優肖像をよこす、俗稱山台甚友郎、浪華に當時浮世繪を畫く人多しといふ(ども皆外に職業ありて、其傍内職に畫もするに、柳齋一人は浮世繪を以て糊口するは、全其技衆人に勝れたる哉知るべし。○追加柳齋はもと原崎陽の人也、妻子共浪華に移り来りて、畫の大きに行はれしに、嘉永六丑の年死せり、其女子米女も亦其業を繼ぐ、畫も拙ならず、今も来舶人より、おろしく其美人畫をこのみて、唐山にもてけて殊の外賞美すといふ、其等は米女浮世繪の名譽といふべし

